

さ　　とう　　しゅん
佐　　藤　　駿

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 411 号
学位授与年月日	平成24年 7月12日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
最終学歴	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	E. フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学 ——『論理学研究』から『イデーン』まで——
論文審査委員	(主査) 教授 野家 啓一　教授 座小田 豊 教授 戸島 貴代志 准教授 直江 清隆 准教授 荻原 理 准教授 原 塑

論文内容の要旨

本論文は、19世紀後半から20世紀前半にかけて「現象学」と呼ばれる哲学を創出し、展開した E. フッサールの思想を主題とする。とりわけ、現象学が文献上初めて明示的に現れた著作『論理学研究』(1900/01年)から、当の現象学の刷新を明らかにした『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』(以下『イデーン』と略記する)までに見出される思索のプロセスとその思想の変貌に焦点を当て、後者の著作において表明されるに至った「超越論的現象学」の内実をいくつかの観点から明らかにすることを試みる。その際、この超越論的現象学とともに同時に生成することになると考えられる世界経験の現象学を論文全体の中心的なモチーフとして設定し、論述は全体として、超越論的現象学において明らかになる「世界経験の哲学」にとって構成的かつ基本的な諸思想を十分に明らかになるように配置され、展開される。

第1章 『論理学研究』における現象学と志向性

フッサールは自ら振り返って、しばしば『論理学研究』を「突破口」となった著作であると述懐している。事実、世紀の変わり目をまたいで公刊されたこの著作には、数年の後に展開されることになる「超越論的現象学」を構成する基本的なアイディアの多くが含まれている。むしろ、これらの概念が徹底した批判と反省を通して鍛え上げられていくところに、この新たな現象学が登場してくるのだと言っても

よいであろう。それゆえ、我々は本論文をこの著作の検討から始めざるをえない。もちろん、ここでこの著作の完全な解明を与える必要はない。我々にとって重要なのは、志向性という概念および理論、その理論の適用例としての意味志向および意味の理論、そして現象学そのものの概念である。

意識は何ものかについての意識である——端的に定式化するならば、志向性とはこのような意識が持つ性質である。例えば「信じる」ということは、「何か」(の存在)を信じることであり、信念は何かについての信念である。「知覚する」こと、例えば「見る」ことは、何かを見ることであり、知覚は何かを知覚することである。『論理学研究』において、フッサールはこうした意識(「作用」とも呼ばれる)の特性を、意識体験の現象学的分析の主題に据える。「現象学的分析」というのは、この著作においては、体験を実質的に構成する「内容」の分析にはかならない。志向性は、体験が有すると考えられるある種の内容によって特徴づけられ、この内容の本性を了解することが意識の志向的本性を解明することになると考えられたのである。例えば、仮に幽霊が存在しないとしても、幽霊が存在すると信じている人は、やはり何かについて(まさに幽霊の存在を)信じているのであって、何ものも信じていない——つまり「無」を信じている——のではない。志向性は、当の志向の対象は存在しないということによって成立しなくなってしまうような「(二項)関係」ではなく、むしろそのような場合であっても成立しうるような意識の様態である。当然この様態(体験内容)は、幽霊が存在すると信じている意識と、ペガサスが存在すると信じている意識とは異なっているだろう。どちらの対象も存在しないが、しかし両者は異なった「内容」を持つのであって、志向性はこの内容によって第一義的に性格づけられるのである。

『論理学研究』におけるフッサールの関心は元々、その表題が示すとおり、学問一般を可能にする論理的体系の可能性にあった。可能な論理的体系あるいは理論一般は、論理学においてその可能性が保証される。論理学が主題とするものは何かと言えば、フッサールに従うならば、言語表現が持つ「意味(命題)」の普遍的・形式的構造と法則である。例えば、矛盾律は、任意の命題とその否定が同時に真であることはないと述べるものであるが、このとき「命題」として念頭に置かれているのは、物理的な記号列としての文ではない。ピュタゴラスの定理を、数学の教科書に印字されている文字列と同一視する人はいないであろう。むしろ我々が「定理」として学んだのは、こうした文によって表現されている命題であり、言い換えればこの文の持つ意味内実である。命題の演繹的体系が理論であって、論理学固有の分析主題は、こうした可能な理論、可能な命題、可能な意味の形式的本質にある。

ところで、この意味ないし命題の「何であるか」を考えるならば、ここに『論理学研究』におけるフッサールの基本的な問題意識が浮かび上がってくる。ピュタゴラスの定理を実際に考え、学ぶ人が地球上からいなくなったとしても、それによって当の定理が無と化してしまうわけではない。この定理は時間のうちに生成消滅しない。論理学の、ひいては可能な真理の体系としての学問の可能性をその根底から了解するためには、意味(命題)一般が有するこうした超時間性=理念性を正確に特徴づける必要がある。フッサールはここにその志向性の分析を交差させる。意味とは、我々が言語表現を用いて何かを言ったり、聞いたり、あるいはそれを読んで理解する際に持つ体験の志向的内容である。もちろん、ここで問題になる「内容」は、意識の流れのうちに現れたり消えたりするような時間的な体験要素ではなく、むしろその体験(意味志向)のスペキエスとしての内容である。例えば、個々の事物が持つ赤さは、その個々の事物によって細かなニュアンスを異にするそれぞれ別の赤さであるが、それらはみな同じく「赤い」と言われる。そのように言われるとき、我々は赤という性質を個々の事物の持つ個々に異なった赤さとしてではなく、むしろそれらがみなそれぞれなりの仕方を持つところの一般の性質として理解している。つまり我々は赤のスペキエスと呼ばれうるものを把握している。同様に、フッサールは意味が持つ理念的性格を、個々の意識内容のスペキエスとして特徴づけるのである。

第2章 意味・対象・経験

しかし、このユニークな意味の理論にはいくつかの問題が潜んでいる。この問題への取り組みと、『イデー』において現れた新たな現象学のコンセプトとは、もちろん無関係ではない。我々は第2章において、フッサールが1908年に行った『意味理論講義』と、1911年に書かれたと思われるノートをテキストとしながら、フッサールの意味理論の変様を追究する。

この思想の変化は、一方で、意味を意識の「内容」と見なす点に関係する。『論理学研究』の志向性理論では、この「内容」は、志向的体験（志向性という性質を示す体験）を実質的に構成する部分として考えられていた。そしてこの内容のスペキエスが意味であると考えられた。ここで「実質的に」というのは、例えば、様々な感覚が体験の部分であるというその意味である。「現象学」とは、『論理学研究』において、こうした意味での体験部分を純粋に質的・記述的に分析するような、意識についての一学科を意味していたのである。ところが、フッサールは『意味理論講義』において、意味をこうした体験内容のスペキエスと見なす『論理学研究』の意味の概念よりも優先して、むしろそれを言語表現を用いて言われたこと、あるいはそれによって考えられたことそのものと見なす意味の概念を取り上げている。「ワートルローの敗者はセント・ヘレナに流された」と言うことによって意味されることは、ワートルローの敗者がセント・ヘレナに流されたということであって、この文によって何か体験の内容（あるいはそのスペキエスの理念）が表現されているわけではない——フッサールの意味概念はこの講義の境に、『論理学研究』のそれから距離を取り始める。意味は、表現体験において志向される対象であり、この対象は体験（内容）の様態でもなければ、そのスペキエスでもない。結果として『イデー』においてフッサールは、この「突破口」となった著作において展開された意味理論をそのままの形では保持していないことが明らかになる。

しかし他方で、『論理学研究』の意味理論は、特にフッサールが「本質的に偶因的な表現」と呼ぶたぐいの表現の意味に関してある重大な問題を抱えていた。本質的に偶因的な表現というのは、指示詞(indexical)、直示詞(demonstrative)といった、使用の文脈によって意味が変わるような表現のことである。私があるときある場所で「これは赤い」といったその発話を持つ意味は、私が別なとき、また別の場所で「これは赤い」といったその発話を持つ意味とは異なる場合がある。明らかに私が「これ」といって指すものが異なれば、その文によって表現される命題は別のものと見なされねばならない（一言で言えば、両者はその真理条件を異にするのである）。

『論理学研究』の意味理論がこれらの表現に関して抱える問題の一つは次のようなものである。主観的に区別できないが、しかし数的には異なった環境のもとで、例えば「これ」という直示詞を含む（典型的に）同じ発話が行われる場合、そこには体験上のいかなる相異も見い出すことができないわけであるから、これら二つの発話は同じ意味を持つ文の発話であるということになってしまう。しかし仮定上、当該の環境は二つのものであって、そこにおいて指示される対象も数的に異なるわけであるから、この二つの発話と同じ意味（命題）を表現する文の発話であるということになるはずがない。後にパトナムが明確に定式化することになるこうした問題系を示唆しながら、フッサールは、経験される環境世界の同一性を可能的な経験のシステムの構成的相関者と見なすアイデアを展開する。すなわち、たとえその場その時、ある意識主体にとって（ローカルに）区別できない環境が存在するとしても、それは可能的経験の（徹底してグローバルな）全体を考えるならば、必然的に区別可能な環境として構成されるはずだという発想である。ここには明らかに「カント的な意味での理念」という、後の現象学において重要な役割を持つことになるアイデアが意味理論の文脈において現れているが、同時に、可能的経験において構成される全体としての世界という超越論的観念論の思想がすでに背景に存在していること

が明らかになるだろう。

第3章 超越論的現象学とその志向性分析

『論理学研究』出版後12年を経て、フッサールは『イデー』を公にする。この第二の主著と言うべき著作において展開された現象学は、「超越論的現象学」ないし「純粹現象学」という名を与えられ、『論理学研究』におけるそれから区別されている。新たな現象学を古いそれから区別しているのは、とりわけその方法である。言うまでもなく、それは『論理学研究』から『イデー』に至る長い自己批判の時を経て、フッサールによって彫琢されたものである。本章は、やはりこの時期に行われた講義やそのほかのテキストを参照しながら、この過程を跡づける。基本的なライトモチーフとなるのは、現象学を心理学から区別するのはいったい何であるのかという問いである。

『論理学研究』において支配的であった現象学のコンセプトにおいては、その主題となる「内容」の概念は、体験およびその実質的な構成要素であるということによって限界づけられていた。我々はこうした分析主題の限定をさしあたり「制限的還元」と表示する。『論理学研究』以後数年の間、フッサールはこの制限的還元が現象学を通常の意味での（経験的）心理学から区別するものにほかならないと考えていた。制限的還元を徹底することによって得られる「体験内容」は、物理的な実在、また物理的な実在の一項である身体をすらその固有の連関のうちに含まない。だとすれば、現象学が扱う体験（内容）を、この固有の身体を備えた一個の人間である「私」の体験として特徴づけることはもはやできないであろう。それはこの実在世界のうちで「これ」といって名指すことのできるような体験ではないのであって、制限的還元によって得られる体験はいわば誰のものでもない。こうして得られる内容をフッサールは「体験本質」ないし「体験理念」と呼び、これがまさしく本質であり、理念であるかぎり、現象学は本来経験的な実在を主題化しその法則的連関を探求する経験的心理学からは区別されねばならない——当時フッサールはそのように考えていた。彼は本質ないし理念を直接的に把握するための方法を『イデー』において特に「形相的還元」と呼んでいるが、この言葉を用いて言い換えるならば、制限的還元は形相的還元になだらかにつながり、まさにそれゆえに形相的還元こそが現象学を心理学と区別する当のものであると考えられていたのである。

しかし、フッサールの反省はそこにとどまりはしなかった。純粹に体験にのみ反省の眼差しを向けたとき、そこに与えられるのは、ある体験的・時間経験（内的時間意識）のうちで与えられる個体的な体験であって、それ自体で超時間的な本質ないし理念であるわけではない。もちろん、他方で、この体験はあの制限的な還元によって実在的な世界からの連関を免れているはずである。こうしてフッサールの目の前に改めて主題として与えられることになるのが「純粹現象」と呼ばれるものであって、この純粹体験を特に主題化する手続きこそ、後に『イデー』において「超越論的還元」と呼ばれることになる当のものにほかならない。この還元によって得られる体験は、経験的・実在的な見方（解釈）から純粹であり、それ自身はまだ実在世界の何かとして解釈（統覚）されていない。まさにこの体験をそのように純粹に与えられるがままに記述し分析することが、新たな現象学の課題となるのであって、ここに「純粹現象学」の基本的な主題領野が切り出されてくることになる。

それが「超越論的現象学」として同時に特徴づけられるようになるのは、まさにこの純粹な体験がそれ自体で志向的であり、この志向的体験は同時にそこにおいて志向されているところのもの、つまり超越的・志向的対象をその相関者として、しかも意識に即して記述可能な仕方と伴っているからである。第2章で新たに登場した意味の概念は、意味のある表現によって言われること、理解されること、つまり意味されることとして特徴づけるものであったが、ちょうどこれと同じ構造が志向的体験一般におい

て見い出されるのであり、例えば知覚すること（知覚体験）は、その志向的本性のゆえに、知覚されたものそのものを純粋な記述の対象となるような仕方で伴っている。

特に志向性という概念を手がかりにして行われるこうした意識の純粋現象学的分析は、『イデー』において「ノエシス-ノエマ」という概念対を生むことになるが、この概念についてもまた本章において簡単な概説を与えることにする。

第4章 現象学的観念論

『イデー』にはまた、『論理学研究』には見られなかった強い観念論的志向が脈打っている。超越論的現象学はそれ自身で一個の観念論である——本章は、このテーゼを掲げてそれを確認することを目的とする。言うまでもなく、我々がまず明らかにしなければならないのは、その観念論の内実である。事実、これを明らかにすることと現象学が観念論であるということを示すことは同じ一つの作業となるだろう。

我々は、フッサールのアイディアの輪郭を描くために志向的空間という概念を導入する。志向性という性質を示す可能な意識からなる全体を、我々は本稿において「志向的空間」と呼ぶ。これは可能的な志向的意識の全体であるが、その全体にはまた、前二章で導入された概念を用いて言えば、その志向的相関者、すなわち諸々の可能なノエマが属している。この可能性の空間が絶対的全体であり、その外に、どのようなものであれ何らかの存在者を位置づけることはナンセンスである——まさにこれによって、フッサール現象学における最も広い意味での観念論（我々はこれを「観念論W」と表示する）が定式化される。この観念論は、およそ対象として考えられうるものは、可能な意識の（志向的）対象として考えられるのであり、意識によって原理的に接近可能ではないようないかなる存在者もナンセンスであると主張するが、その実質的な内容は、このトートロジカルな言い回しからもすでに示唆されているように実はきわめてわずかである。実際、この観念論Wは『論理学研究』においてすでに事実上主張されていると考えられるのが妥当であり、この意味でフッサールが観念論者ではなかったということは一度もないということが明らかにされる。

逆に言えば、『イデー』において見い出される観念論は、この観念論Wとは異なった内実を持っているということになる。『イデー』における観念論は、観念論Wと完全に別物であるというよりは、むしろそれよりも論理的に強い主張として性格づけられる。我々はこれを「観念論S」と表示する。それが観念論Wよりも「強い」というのは、観念論Wは、実在的世界の意識への実質的な依存性を説くものではないからである。これに対して、観念論Sは今やはっきりとこれを主張する。観念論Wが要求するのは、せいぜい世界の現実性は、可能な意識の存在を含意するというそのことであって、意識は現実存在する必要はない。つまり、意識は実際には存在しなくても観念論Wはその妥当性に関して影響を受けない。それに対して観念論Sは、意識が実際に存在するのでなければ、世界もまた存在するものとしては、つまり「現実性」という身分を持つものとしては成立しえないということを説いている。その思想の核心にあるのは、現実性は単なる、純然たる可能性からは取り出しようがないということ、つまり現実性一般がそもそも意味を持つためには、必然的に現実的なものであるようなあるものを前提するということであり、まさにこの絶対的に現実的なものこそ経験する意識、顕在的な経験意識である。この意識の現実性が、現実性=存在一般のための必要条件と見なされることによって、世界の現実性は意識の現実性に依存すると考えられることになるのである。

本章ではまた、フッサールが『イデー』において提起した関連する思考実験、いわゆる「世界無化」の思考実験を取り上げ、その内実を上観念論についての考察から明らかにするとともに、哲学として

の現象学と実在論との関係について論じ、ともすれば誤解されがちな現象学的観念論のポイントを改めて明確にする。

第5章 世界経験の現象学

最終章は、前4章において確認されてきたフッサール現象学のアイデアを、超越論的現象学における「世界経験の哲学」というモチーフのもとに総合することを試みる。中心となるのは、超越論的現象学における知覚経験の理論であるが、フッサールはこの種の理論を彼が「理性の現象学」と呼ぶものとの密接な連関のうちで取り上げているがゆえに、我々もまたこの「理性の現象学」と呼ばれるものの一部、最も根底的な一部としての経験の理論に焦点を当てることになる。それゆえ、フッサールが「理性」と呼んでいるものの内実もまた、本章の論述においてその基本的な点に関して明確にされることになろう。

まず我々は、近代の哲学において陰に陽に前提されていた経験の表象説に対する批判という観点のもとで、フッサールによる知覚の現象学を特徴づける。近代の、とりわけ経験主義的な認識論的哲学を支配していたのは、実在世界に属する事物を知覚するに際して、我々に与えられるのはその事物の心的な代表=表象（「観念」、「センスデータ」等々）のみであり、事物そのものはそうした体験の「外側」にあるという思考の枠組みであった。だが、こうした枠組みのなかで構成される知覚経験の理論がもたらすのは、せいぜい「外部世界の問題」という認識論的アポリアでしかない。これに対してフッサールはむしろ、このアポリアが生じるその根拠を表象説そのものの枠組みのうちに認め、これを現象学的に批判することによって知覚の哲学が巻き込まれる困難を剔抉している。フッサールが絶えず主張し続けたのは、知覚経験は何か「外的な」事物の「内的な」表象の体験などではなく、むしろそれは事物そのものの経験であるというまさにこのことであった。通常知覚経験において我々の対象であるものはほかならぬ事物であり、この事物こそが、単に考えられたり想像されたりしているのではなく、知覚において顕在的=有体的に「与えられている」のである。

もちろん、だからといって事物が心の「中に」あるとか、体験そのもののうちに存在するとか言われるわけではない。むしろ事物は、まさに事物として、意識そのものとは別種のものという性格そのままに意識されているのであり、この「意識それ自身ではない」という性格が事物経験の対象の本質に属している。意識は、意識されているかぎり絶対的に存在する。しかし、事物はそれが意識されているからといって絶対的に存在するわけではない。幻覚の場合にそうであるように、対象が明晰に意識されているにもかかわらず、それが存在しないということがありうる——まさにそうした可能性によって、事物として意識されている対象の「超越的」性格が浮き彫りになるのである。事物、そしてそれが持つ性質、あるいはそれらからなる事態、いや結局は「実在世界」と呼ばれるものは、知覚経験においてある仕方直接的に与えられているにもかかわらず、それが意識とは異なった性格、つまり「超越」という性格を持ち続けるのである。

ところで、第4章において定式化された二つの観念論と、本章においてより詳細に論じられる知覚経験の理論からすれば、世界は可能な経験意識の全体の外には決してない。我々はこれを「世界は形而上学的には超越的ではない」と表現する。しかし、それにもかかわらず世界は意識にとって「超越」であるという性格を持ちつつ、まさにそうしたものとして「与えられる」のであって、しかもそのように与えられることなしには、世界は自らを現実として示すことはない（これは観念論Sからの帰結である）。その超越の意味は、本当の世界は表象体験一般の背後に「隠されている」というのではなくて（これこそ「世界は形而上学的には超越的ではない」というその意味である）、結局は我々はその世界の本性を認識的に完全には展開しえないというそのこと、ライプニッツの言葉を借りるならば、世界は展開され

るべき「無限の襞」を持っているというそのことにほかならない。我々はこうした世界の超越的性格を、「世界は認識的に超越的である」ということによって表現する。それゆえ、世界は形而上学的には超越的ではないが、認識的に超越的なのである。言い換えるならば、世界は確かに意識のうちに自らを展開し、それどころか意識のうちにおのれを示さざるをえない——意識だけが世界のエレメントである——が、しかしまさに意識が自らを展開する仕方は、当の意識にとって完全には認識されないものとしてなのである。我々が本論で明らかにしたかぎりでは、世界経験の哲学としての現象学の核心をなす主張がここにある。世界は意識の「内部」に意識の「外部」として自らを展開するのである。

補論

なお本論文は、特に第3章から第5章において論じられた主題と密接に関連する2つの補論を含む。一方は、意味の理論と知覚の理論両者に関わるものであり、今日的な議論を少しく参照しながら、知覚経験の内容が持つ非概念性について論じるものである。他方においては、フッサールにおける形而上学のコンセプトについて、我々が本論で扱った時期に見出されるテキストを主に用いながら、フッサールが変わらず抱いていた「最終哲学」(=形而上学)のアイディアが検討される。

論文審査結果の要旨

本論文は、フッサールの前期および中期の思想を「意味作用」の概念を軸に丹念にたどり直しながら、彼が樹立した「現象学」が「超越論的観念論」としてその結構を整える過程を斬新な考察を通じて跡付けたものである。まず第1章および第2章において、論者は現象学の出立を告げる『論理学研究』の志向性概念を精査し、そこから「存在独立性」と「パースペクティヴ依存性」という二つの特徴を取り出し、意味志向とその直観的充実が志向的本質のスペキエス的・理念的な同一性を前提していることを指摘する。その上で、『意味理論講義』を参照しつつ、フッサールにおいては経験的意味の理念的・客観的同一性が、可能的経験の連関におけるグローバルな同一化作用に基づいていることを明らかにする。続く第3章では、『イデー』の論述に沿って、現象学的方法の要となる「現象学的還元」の手続きが吟味され、理解＝直観の根底にある絶対的所与性へ立ち戻ることの意義が確認される。論者によれば、還元によって取り出されたノエマの同一化的統一可能性の中にこそ、対象の可能的同一性の基盤が存するのであり、ここから「超越論的観念論」への道が拓かれるのである。

本論文の現象学への独自の貢献は、第4章および第5章で展開される。第4章で論者は、可能的な志向的意識の全体を表す「志向的空間」という概念を導入し、それに基づいて弱い観念論Wと強い観念論Sとを区別する。前者が、可能な対象は可能な意識の対象として志向的空間に属するとする主張であるのに対し、後者は対象の現実存在は意識の現実存在を前提するような仕方で志向的空間に属する、と主張する。そこから論者は、フッサールの現象学を「世界の現実性は意識の顕在性に依存する」という強い観念論Sを含意するものであることを「世界無化」の思考実験などを援用しながら明らかにする。次に第5章では、世界の「内在」と「超越」の問題が主題化され、「理性」を全体として一つの現実を成立させる主観性のシステムとして捉え直すことによって「世界は形而上学的には超越的ではないが、認識的には超越的である」という結論を導き出す。最後に論者は、現象学を表象主義や主観主義と解する立場を退けながら、フッサール現象学の核心的主張を、世界は意識の「内部」に意識の「外部」として自らを展開する、という逆説的テーゼとして特徴づけて論を閉じる。

以上の論述は先行研究を十全に踏まえながら、論者の独創に関わる部分を周到に論証したものであり、その成果が現象学研究の発展に大きく寄与するものであることは疑いを容れない。よって本論文の著者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。